

研究資料 黒田清輝宛 岡田三郎助書簡について

著者	高山 百合
雑誌名	美術研究
号	420
ページ	69-71
発行年	2016-12-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00006088/

研究資料

黒田清輝宛 岡田三郎助書簡について

高山 百合

(Ⅱ) フランス留学からの帰国後

〔九〕 明治三十五年九月二十日付

(Ⅲ) 明治四十年代

〔十〕 明治四十二年か 二月二十七日付

〔十一〕 明治四十四年六月三十日付

〔十二〕 大正三年か 三月二十二日付

東京文化財研究所には、岡田三郎助から黒田清輝に宛てた書簡が十三通保管されている。そのうち一通は、明治三十年（一八九七）に渡仏した留学時代の動向を伝えるもので、岡田がそこに名を連ねるも、実際には久保田米僊が書いた連名によるものである。それゆえ、岡田三郎助個人からの書簡は十二通のみである。このことは、岡田と黒田の深い関係性を考えても、さらには、岡田と同様に黒田と近い存在であった作家たちが黒田に宛てた書簡の数などと比しても、きわめて少ないと言える。

ここで取り上げる東京文化財研究所所蔵の黒田清輝宛て岡田三郎助書簡十二通について、書かれた時系列順に整理すると、およそ次の三つの時期に区分することができる。

(Ⅰ) 京都・奈良時代

〔一〕 明治二十九年十二月五日付

〔二〕 明治二十九年十二月十日付

〔三〕 明治三十年一月一日付

〔四〕 明治三十年一月十九日付

〔五〕 明治三十年一月二十二日付

〔六〕 明治三十年二月一日付

〔七〕 明治三十年二月九日付

〔八〕 明治三十年二月十四日付

またこれらの十二通を検討すると、筆跡が幾種類もあり、明らかに複数の人物が「代筆者」として書簡の執筆を行っていることがわかる。他者に書簡の代筆を依頼するというのには、様々な理由があるだろうが、その大きな理由としては、岡田三郎助と深く親交を結んでいた美術評論家の大隅為三が、「大隈重信侯は署名をされたことが無いと聞くが、同じ佐賀県出身の岡田さんも、大隈さんと同じように署名することが誠に嫌いだ。そのわけは御自身悪筆だと信じているので、なかなか自分の名を書かぬ。しかしよく見ると氏の署名は氏の全部を物語るようなもので、書家気取ってあやしい字を書く者などよりも、はるかに氏の人格を現したものだと思う、悪筆どころか、実に好い字だ。併し氏自身ではそう云うわけで、なかなか手紙を書かぬ。今を去ることサテ幾年になるか、和田英作君のところへ何かの用事で送られた手紙は、友人諸君中誠に珍しいことと云われており、黒田清輝氏に見せたところ、これは将来国宝にでもする値打ちがあるから大切に保存しておくべきものだと言われたという、これをもつても岡田さんが、如何に字を書くことが嫌いであったか解ると思う⁽¹⁾」と述べるように、岡田が自らのことを「悪筆だと信じて」いたことから、文字を書くことを望まなかったという大きな理由がある。事実、東京文化財研究所所蔵の十二通のうち、(Ⅲ)に区分される、明治四十年代以降に書かれた三通は、明治三十九年（一九〇六）に結婚した小説家の岡田八千代が代筆したものである。ただし、(Ⅰ)の京都・奈良時代の八通については、単に文字を書きたくないという以上に、代筆を依頼するにふさわしい大きな理由があったのである。

岡田は明治二十九年（一八九六）、東京美術学校校長である岡倉天心のすすめで、

文部省留学生としてフランスへ渡るための事前の古美術研究のため奈良へ赴いたのであるが、その途中で風邪と腸チフスという大病を患い、京都での療養生活を余儀なくされた。そしてその後遺症として、以後も難聴を患うことになった。つまり、悪筆のため自ら筆を執って書くことを拒むというよりはむしろ、病氣療養中のため、机につくことも筆を執ることもままならなかったのである。

京都での療養生活の様子については、岡田三郎助自身も「平凡なる私の修業時代」という述懐の中で詳細に語っており、ここで扱う岡田の書簡の代筆者を考えるうえでは重要なものであることから、少々長い下記のとおり転載する。

明治廿八年 黒田、久米両師が、山本芳翠氏の塾を引継いで天真道場と云ふのを設けられた。私も其処へ這入つて勉強してゐたが、間もなく美術学校に洋画科が設けられて、それで皆が入学する事になった。同時に私は助教授に任命せられた。そして欧州留学が内定してゐたので、校長岡倉氏の勧めに従ひ、奈良見学を思ひ立つて十一月頃出発して、途中京都に一週間程滞在して奈良へ着いた。対山館と云ふ宿屋に泊つて四五日見学してゐたが、妙に腰が痛かつたり頭が痛かつたりしてならない。大した病氣とも思つてゐなかつたので、相変らず写生したり見物したりしてゐる処へ、京都の友人石田益敏君が来てくれたので一緒に写生に出たが、その日は逆も苦しくて写生が出来ない。宿へ帰つたら非常に発熱し、到頭その儘床に就いてしまつた。石田君は用事があつて帰るし、病氣は重くなるばかりで、遂には人事不省になつた。折よく其処へ中村勝治郎君が来てくれたが、その時にはもう私の耳が双方共駄目になつてゐたので筆談で話した程であつた。医者も見ても貰つたが非常に不親切な医者で大した病氣でないから入院する必要はないと云つてゐた。私はもう東京へ帰りたくてならない。毎日その事ばかり云ひ続けてゐた。其処へ再び石田君がやつて来たので、一とまず石田君に連れられて病の体を京都迄運ぶ事になった。幸ひ中村君の知つてゐる病院があるので、見て貰ふと腸チブスだと云ふから早速入院した。そのうちに友人からの通知に接して、東京から母が来るし親類の者も来て呉れたので、今迄の心細さも忘れて養生する事が出来た。もう助からないと思はれて

ゐた私の病氣も三月の末に退院する事が出来たが、此の様のお世話を思ふて、その当時は自分で自分の体でない様な気がしてゐた。耳の方は全快とまではゆかなかつた。今に到る迄左の方は全然聞えない。腸チブスで脳を悪くする人の事を思へば、耳の悪い位はまだ幸ひの方かも知れないと自ら慰めてゐる。⁽²⁾
線部筆者。

ここに言及されている「石田益敏」、「中村勝治郎」、それから「東京の母」と「親類の者」という人物こそが、京都・奈良時代においては岡田の最も近くにいた人物であり、このうち、次に述べるように、石田益敏、中村勝治郎、「親類の者」がそれぞれ書簡を代筆したようである。

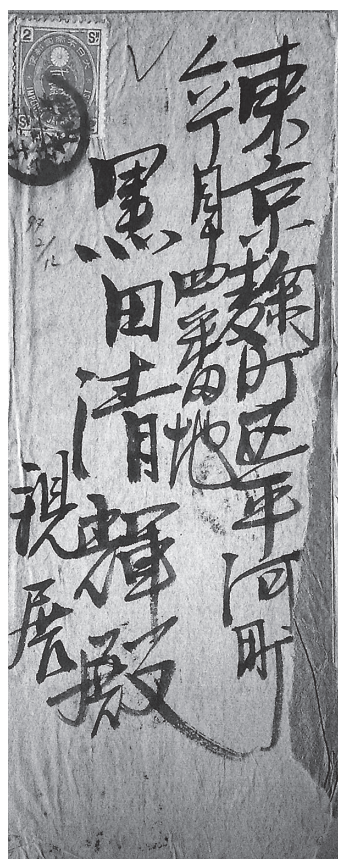
この時代に書かれた八通の書簡について、とりわけ封筒に書かれている同一文字を中心にしながらか比較検討してみると、明らかに岡田三郎助本人筆である「一」(明治二十九年十二月五日付)と「三」(明治三十年一月一日付)を除く六通について、①「二」(明治二十九年十二月十日付)、②「四」(明治三十年一月十九日付)、③「五」(明治三十年一月二十二日)、④「六」(明治三十年二月一日付)、⑤「八」(明治三十年二月十四日付)、⑥「七」(明治三十年二月九日付)という分類が可能であり、三人の代筆者を想定することができる。このうち①「二」(明治二十九年十二月十日付)については書簡中に「石田」が代筆したと明記されておとり、石田益敏の手になるものである。石田益敏(一八七三―一九三六)は、明治六年静岡県に生まれ、同二十三年曾山(大野)幸彦に師事し、同二十五年明治美術会教場(後・明治美術学校)に入学。同三十一年東京美術学校西洋画撰科に入学。その後明治三十五年より千葉県佐倉中学校教師、同四十年茨城県土浦中学校へ転任し教鞭を執つたというように、画家として活躍したというよりはむしろ美術教育の分野を担つた人物である。⁽³⁾この時期の石田は京都にいたようであるが、石田と岡田は、曾山(大野)幸彦の主宰する大野画塾において接点を持つており、若き頃より岡田と深い友人関係にあったようである。その縁から病氣療養中の支援をかつてたのであろう。たまたま大病を患つた場所が、東京から遠く離れた京都であつたという場所の問題はあるにせよ、岡田の画業のルーツにある曾山幸彦の大野塾、大幸館、そして明治美術会において形成された人的なネットワーク

クが、白馬会結成以降の明治三十年前後に至ってもなお岡田の周辺に濃く残っていたことが明らかになる。このことは岡田の初期の活動を考えるうえでも重要なことである。

さらに、②については、黒田に宛てて初めて書簡を代筆した「四」（明治三十年一月十九日付）において、「代 三郎助姉」と書かれているとおり、岡田の姉の中野スガの手になるものであり、岡田の療養生活をそばで支えた彼女は、合計四通の書簡を代筆している。

また、③「六」（明治三十年二月九日付）については、中村勝治郎により代筆されたと考えられる。中村勝治郎（二八六六一一九三二）は奈良市に生まれ、京都で山内愚僊に絵の手ほどきを受けた後、明治二十八年に第四回内国勸業博覧会の審査員として京都を訪れた黒田清輝と交遊を深め、白馬会の結成にも参加した。同二十九年、京都・奈良に滞在中の岡田三郎助が病臥した際、身辺の世話をしたり、黒田との連絡役を務めたりしたことで知られ、その後フランスへ留学した岡田三郎助の欠員補充として、黒田の推薦を受けて、東京美術学校雇を任命されたという経歴を持つ洋画家である。中村勝治郎は、本書簡が出された当時において岡田の最も近い場所にいたひとりであるという状況証拠に加え、東京文化財研究所所蔵の「中村勝治郎筆 黒田清輝宛書簡」（挿図1）の筆跡と照合することで、本書簡が中村による代筆である可能性の高さが浮かび上がる。

書簡はそもそも本人自筆のものであると考えられがちであるなかで、岡田三郎助の場合は、書簡の数がさわめて少ないことに加え、そのほとんどが代筆であるとい



挿図1 黒田清輝宛中村勝治郎書簡

う特殊な事情がある。しかしそれゆえにこそ、岡田三郎助の書簡を考えるにあたっては、その内容もさながら、誰がそれを書き得たかという代筆者の問題を子細に検討することで、その書簡が書かれた当時の、岡田の周囲の人的ネットワークを浮き彫りにすることができるのである。

註

- (1) 大隅為三「岡田氏断片」『美術』第十四卷第三号、昭和十四年三月。
- (2) 岡田三郎助「平凡なる私の修業時代」『中央美術』第七卷第三号、大正十年三月。
- (3) 石田益敏については『もうひとつの明治美術』展図録、静岡県立美術館ほか編、二〇〇三年、および、金子一夫「大正・昭和戦前期全国中等学校図画教員の総覧的研究」『茨城大学教育大学教育学部紀要・教育科学』第六十三号、二〇一四年を参照。
- (4) 森芳功「三宅克己の画業と生涯（三）——明治学院入学から大野画塾時代まで」『徳島県立近代美術館研究紀要』第十四号、徳島県立近代美術館編、二〇一三年。
- (5) 中野スガについては、松本誠一「岡田三郎助の生家について」『佐賀県立博物館・美術館館報』第一三四号、二〇〇五年三月を参照。
- (6) 『中村勝治郎』展図録、奈良県立美術館編、二〇一一年。

（たかやま ゆり・福岡県立美術館学芸員）